

O. F. ボルノウ『練習の精神』とメビウスの輪

Vom Geist des Übens and Möbius Loop

井谷信彦*

ITANI, Nobuhiko*

要旨

本稿の課題は、現代ドイツの教育学者ボルノウ (O. F. Bollnow) の著作『練習の精神』を改めて読み解くことによって、本書に孕まれている、従来は見落とされてきた議論の「ねじれ」を浮かび上がらせ、この「ねじれ」をバネとして打ち開かれる、練習という現象の両義性に満ちた特徴を説き明かすことにある。この探求の成果として本稿は、①『練習の精神』には、機能主義に基づく観点と機能主義を越えた観点という、相容れない二つの視座が表裏一体となって並存していること、②これら二つの視座が絡み合って生まれる議論の「ねじれ」が、『練習の精神』の読者を、練習という営みの核心をめぐる「問い」へと導き入れる働きを宿していること、③この議論の「ねじれ」をバネとして巻き起こされた「問い」の渦のなかでのみ、機能主義に基づく観点にも機能主義を越えた観点にも容易に収まらない、両義性に満ちた練習の特徴が、両義性を両義性として開き保ったまま浮かび上がってくる、という三つの点を明らかにした。

序論 本稿の課題

本稿の課題は、現代ドイツの教育学者ボルノウ (O. F. Bollnow) の著作『練習の精神』¹を改めて読み解くことにより、本書に孕まれている、従来は見落とされてきた議論の「ねじれ」を浮かび上がらせ、この「ねじれ」をバネとして打ち開かれる、練習という現象の両義性に満ちた特徴を説き明かすことにある。

邦訳書監訳者の岡本英明も巻末に述べているように、ボルノウの『練習の精神』は、従来軽視されていた練習という営みの価値を「正しく」説き明かし、教育／教育学における練習の意義を明らかにした著作として、これまでも高い評価を受けてきた²。しかしながら、本書の読解を試みた従来の諸研究は、ボルノウの論考に孕まれている議論の「ねじれ」を見落としているという点で、本書の全体を貫いている重要な趣向を取り逃している。以下に説き明かされるように、本稿が注目しようとするこの奇妙な「ねじれ」こそは、練習という営みをめぐるボルノウの探求の、核心を占める特徴にほかならない。というのも、この議論の「ねじれ」に注目することで初めて、練習という現象に特有の両義性に満ちた特徴が、十全に浮かび上がってくることになるからだ。

『練習の精神』の全体を規定しているこの「ねじれ」を浮かび上がらせ、この「ねじれ」の背景と意義を説き明かすために、本稿の議論は以下のように構成される。

第一節 練習と「正しい生活」

第二節 『練習の精神』に対する批判

第三節 「泰然自若」というアポリア

第四節 目的内包型の行為としての練習

第五節 『練習の精神』の議論の「ねじれ」

第六節 『練習の精神』とメビウスの輪

第一節においては、人間が「正しい生活」を営むに当たって、練習が果たすべき「機能」に関する、ボルノウの論考が概観される。第二節においては、『練習の精神』に対する重要な批判として、桐田清秀による論稿が詳細に検証される。第三節においては、ボルノウが重視していた「泰然自若」という理念を精査することで、桐田による批判の根拠が明らかにされる。

続く第四節においては、『練習の精神』の議論のなかに、桐田の指摘したような問題点を克服しうる射程が、すでに組み込まれていたことが説き明かされる。第五節においては、『練習の精神』に組み込まれている二つの異なる視座の特徴が説き明かされ、相互に矛盾した二つの視座が絡み合うことで生じる、議論の奇妙な「ねじれ」の存在が明らかにされる。最終第六節においては、この議論の「ねじれ」こそが『練習の精神』の核心を占める趣向であり、練習という現象の十全な解明に欠くことのできない構造であることが説き明かされる。

以上の探求によって、ボルノウの『練習の精神』には従来見落とされてきた議論の「ねじれ」が孕まれている

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

ことを明らかにすると同時に、この奇妙な「ねじれ」を注視することによって初めて、練習という現象の特徴を歪みなく説き明かすことができるという実情を明らかにすることが、本稿の課題である。

第一節 練習と「正しい生活」

ボルノウによれば、西洋の歴史と伝統のなかで、練習（die Übung）は大変軽視されてきており、人間学の探求においても「ほとんど注目されることがなかった」のだという。これに対してボルノウは、人間は練習によってのみ「生の十全な発展と充実に至る」ということを証明するべく、練習の果たすべき「機能」（die Funktion）を説き明かそうとした³。これまで単に「退屈で面倒な」だけの「生徒と教師にとっての重荷」として把握されていた練習という営みを、私たちの生の「発展と充実に」欠かせない要素として捉え直した点に、『練習の精神』に固有の意義があることは間違いないだろう⁴。

「練習の復権」に関わるこの課題意識を、ボルノウは、次のような「問い」として提示している。

「……」練習が、人間の生のなかで目的合理的かつ必要不可欠な遂行として、そのなかでのみ人間の生が十全な充実を得ることのできる何かとして、立ち現れてくるようにするためには、我々は、人間の生をどのように概念把握しなければならないか⁵。

本節においては、ボルノウが「本来の練習」の機能をどのように説き明かしているかという点に絞って、『練習の精神』の論旨を概観しておこう⁶。

結論を先取りして述べておこなうなら、ボルノウにとって練習とは、「正しい生活への道」にほかならない。私たちは普段、例えば「ピアノの練習」という場合のように、何か一定の技能を獲得することや上達させることこそ、練習の目的だと考えている。練習にこうした役割があることは、無論ボルノウも認めている。しかしボルノウによれば、こうした見方は練習の「本来の目的」を捉え損ねているという。特定の領域における技能の獲得や上達などではなく、人間を「正しい生活」へと導くことこそが、練習の果たすべき最も重要な機能なのだということである。このように、「練習において獲得されるべき技能」だけを重視してきた従来の練習概念を大きく転換させ、「正しい生活」へと向かう生のラディカルな転換を練習の「本来の目的」に据えた点に、『練習の精神』の核心を占めるボルノウ一流の提言があった⁷。

だとすれば、ボルノウの言うところの「正しい生活」（das richtige Leben）とは、はたしてどのような生活を指しているのだろうか。

「練習における心の状態」と題された『練習の精神』

の第七章において、ボルノウは、練習には「精神集中」（die Konzentration）を形成するような働きがあることを説き明かしている。ボルノウによれば、練習が何程かの成果を収めるためには、「練習されるべき行為」に対する「我を忘れた没頭」（die selbstvergessene Hingabe）が求められるのだという。とはいえこれは、練習を始める以前から完備されていなければならない前提ではない。そうではなくて、我を忘れて練習されるべき行為に集中しているこの状態は、練習のなかで練習を通して初めて形成されるべきものなのだ、というのである⁸。

生徒に練習に対する精神集中が要求される場合に、この精神集中は単に練習を始める前に満たさなければならぬ前提条件なのではなくて、練習のなかで初めて形成され育まれるものなのだ⁹。

ボルノウが「正しい生活」と呼んだのは、このように練習を通して育まれる「精神集中」を身につけ、私たちが陥りがちな「無節操と注意散漫の状態」を抜け去った生活のことである。「ピアノの演奏」のように特定の技能を獲得することではなく、この「精神集中」を育むことによる「人間の変化」こそ、練習の「本来の目的」なのだという点に、ボルノウの論点があった¹⁰。

ここから、単なる諸技能の獲得や上達に留まらない、練習の機能に関するボルノウ固有の探求が始まる。練習のなかで形成される「精神集中」に関する洞察を深めるために、ボルノウは、例えば日本の弓術の練習などに見られる、「無我」（die Ichlosigkeit）の境地に注目した。日本滞在中に弓術に取り組んだヘリゲル（E. Herrigel）らによる報告を参照しながら、ボルノウは、日本における弓術の練習の目的が、やはり単なる技能の獲得や上達にあるのではないことを見て取った。弓術の練習を通してヘリゲルが感得したのは、練習を通じて「練習者自身が変化すべき」なのだということであり、練習者自身の「内面の完全性」を達成することこそが練習の真の目的なのだということだった¹¹。ここで重要視されるのが、我欲を離れ去った「無我」の境地である。

ボルノウがヘリゲルに依拠しながら述べているところによれば、弓術の練習者は、自己を捨て去り「無意図」かつ「無我」になることを求められるのだという。弓術の練習にとって重要なのは、的に当てるための技術を磨くことよりも、むしろこのように「無欲」を極めた心の状態に到達することだということだ。このとき、練習者は「的に一つになり」、矢は「まるで自然に」弓を離れて、「誤りのない確実さで的に当たる」。こうした「無我」の境地が初めて体験されるとき、練習者は言葉にならない幸福感を味わうとされる。この点においてボルノウは、日本における弓術の練習が、練習される内容（弓術）と

は無関係に練習自体として、固有の「価値」と「目的」を保持していることを見て取った¹²。

このとき重要なのは、練習を通して、人間の内面の態度が変化することである。なぜなら、日常のせわしない活動を越えた高みという件の内面の状態は、単に遂行の完全さを達成するための前提なのではなくて、練習を通して達成されるべき目的になるからだ¹³。

こうした洞察に基づいて、ボルノウは改めて、人間の「自己形成」に対して練習が果たすべき役割を、詳しく説き明かそうとした。練習を通して達成されるべき件の「正しい生活」は、「無我」の境地に関する議論に示唆を得ることで、改めて「内面の自由」(die innere Freiheit)と「泰然自若」(die Gelassenheit)という二つの概念を用いて、詳細な特徴を説明されることになる。

ボルノウによれば、前者の「内面の自由」という概念は、「人間が状況の諸条件と調和しているという感情」を表現しているのだという。とはいえこれは、人間が全ての「依存」や「強制」から解放されている、ということの意味しているのではない。人間を取り巻いている環境が人間に勝手に許すというのではなく、むしろ、人間のほうが自己を改めて環境と「調和」しながら生きている状態のことを、ボルノウは「内面の自由」という言葉で表現したのである¹⁴。この「内面の自由」の基調をなしているのが、環境と衝突しかねない「我意」や「我欲」を「手放した」(gelassen haben)、「泰然自若」という状態にほかならない。私たちを取り巻く「状況の総体」との調和を実現するには、手前勝手な「我意」や「我欲」に囚われることのない、「泰然とした」(gelassen)態度が要求される。この泰然とした「内面の自由」に向かって練習者の自己変容を引き起こす点に、人間形成に関わる練習の深い意義がある、とボルノウは考えた¹⁵。

こうして、練習を通じた「精神集中」の育成に関する議論は、日本の弓術の練習に関する検証を経ることで、練習を通じた「無我」または「泰然自若」の達成という課題に逢着することになる。これ以降ボルノウは、件の「内面の自由」に規定された「正しい生活」のことを、改めて「在るべき生活」と呼び、「内面の自由への道」としての練習の役割を細かく検証していく。本稿の課題に照らして特に興味深いのは、練習が、人間の意図と努力に基づいて「内面の自由」を獲得するための、代わりの利かない「唯一の手段」だという指摘である。

ボルノウによれば、「内面の自由」に規定された生活＝「在るべき生活」に到達するための「道」(Weg)は一つではないという。実際に、この「在るべき生活」に至るための道程として、ボルノウは練習以外にも二つの通路を認めている。実存哲学によって示された、「生の危機」

(die Lebenskrise)を潜り抜けて、これまで漫然と過ごしてきた日常生活を抜け出してしまい、現存在の「覚悟性」(die Entschlossenheit)に至るという通路が一つである。また、ニーチェ(F. Nietzsche)のいう「大なる真昼」のように、「大きな幸福の瞬間」に「深い満足の感情」に貫かれて、「もはや望むべきものが何も残っていない」ような状態に至るという道もある。これら二つの可能性を、ボルノウは、近現代の哲学(die neuere Philosophie)によって提供された道程として紹介している¹⁶。

とはいえボルノウによれば、「在るべき生活」に向かうこれら二つの道程と比較しても、練習は特別重要な位置を占めているのだという。なぜなら、危機や幸福の瞬間は「意図的に招き寄せることができない」のに対して、練習は「在るべき生活」への変化を「意図的に」しかも「自己に固有の努力によって」引き起こすことができるからである。練習とは、泰然とした「内面の自由」を、単に偶然に任せるのではなくて、私たちの意図と努力に基づいて獲得できる、「唯一の手段」であるという点に、ボルノウの主張の核心がある¹⁷。

誤解されないように明確に強調しておくなら、練習は、ここで追求されている生の充実を達成するための、唯一の方途というわけではない。けれども、練習は、この変化を意図的に意識的な努力によって引き寄せるための、唯一の手段なのだ¹⁸。

こうして練習は「正しい生活への道」＝「内面の自由への道」として捉え返され、私たちが「在るべき生活」に到達するための通路として、一定の技能の獲得や上達に留まらない機能を、与え返されることになる。

第二節 『練習の精神』に対する批判

このように、練習の機能についてのボルノウ議論は、西洋の伝統における練習の概念と、日本の弓術などに見られる無我の思想を橋渡しして、後者の視点から前者を問い直そうとした点に、固有の意義を持っていると言えることができる。しかしながら、このように東西の文化を混交してみせたボルノウの議論に対して、厳しい疑問を投げかけている研究者もいる。なかでも、ボルノウの用いた「練習」の概念と、日本における「稽古」の概念との差異に目を向けた、桐田清秀の論稿は、本稿の課題にも関係してくる重要な批判を含んでいる¹⁹。なお、以下においては、桐田の論稿に関連する箇所においてのみ、彼に従って「練習」と「稽古」を区別しておく。

ボルノウが導きの糸とした、日本の伝統文化のなかの「練習」を、「稽古」あるいは「修行」と言い直した桐田は、西洋の「練習」と日本の「稽古」の差異を次のように説き明かしている。(1)練習はかならず一定の技能の

獲得・上達に関係しているが、稽古はかならずしも一定の技能の獲得・上達と関係しているわけではない。(2) 稽古には予め模範となるべき一定の「型」が与えられているが、練習にはこうした「型」が与えられていない。

(3) 稽古は練習とは違って徹頭徹尾「身体」に関わる問題であり、心や頭の動きではなく、身体の動きを習得することを重視している²⁰。これら三つの相違点に注目することで、桐田は、練習と稽古を同一視したボルノウの議論の欠点を、次のように指摘している。論述の都合から、先程とは論じる順序を逆にした。

(3) 稽古と身体の密接な関係について桐田は、この関係をボルノウが詳しく論じていないことに「不満」を抱いている。稽古には、ボルノウが言う「精神の領域における練習」など存在しないし、これと「身体の領域における練習」を区別するような考え方もないというのである。稽古は「徹頭徹尾」身体に基づいて身体に関して行われる。この身体の動きに「専心没頭」するからこそ、身体の動きを身体に委ねて、自己の意識への執着を捨て去った、「放心」「無心」「不動心」と言われる状態に到達することができるのだ、と桐田は説いている²¹。

確かにボルノウは、日本の弓術における稽古について論じるさいに、無我の境地の重要性を強調するあまり、稽古者の身体性について詳しく論及していない。もしも桐田の言うように、稽古が「徹頭徹尾」身体の動きのみに関わる営為だとすれば、ボルノウのこの議論が片手落ちであるとの印象は否めない。しかしそれは、このときボルノウの問題意識が、個々の稽古のプロセスよりも、人間全体の変容に向けられていたからだろう。ボルノウが弓術の稽古に関する思想を紹介したのは、「精神集中」を身につけた「正しい生活」の特徴を、さらに詳しく説き明かすためだった。したがって、稽古と身体との密接な関係を指摘した桐田の批判は、極めて重要な論点を補うものではあるが、ボルノウの論考の価値を大きく損なうものではないと考えることができる。

(2) 桐田はまた、稽古には最初から「進むべき道」が設定されており、この「進むべき道」を歩むための型が先に与えられていることを、ボルノウが見逃しているとして批判している。稽古には型があるため、稽古の先に何が起こるのか「予測可能」であり、「身心の準備」を整えることができる、と桐田は言う。このことはすでに「ボルノウが想定している練習と大きく異なる」というのだ。さらに桐田が指摘しているところによれば、稽古の要点は、一定の技能を獲得することではなく、一定の所作を「型通りに行うこと」にあるのだという。しかもこの「型通りに行うこと」に向けた稽古は、単に型通りに「できる」ようになるだけでは不満足であり、これを「自然に」行うことができるようになるまで、さらには「完璧に」行うことができるようになった後にも、継続されなけれ

ばならないというのだ²²。

しかしながら、確かに練習には稽古のような「型」の思想はないかもしれないが、だからといって練習が何の模範も規範もないまま、闇雲におこなわれているわけではないだろう。「ピアノの演奏」の練習には、優れた演奏の模範があり、「英単語の発音」の練習にも、ネイティブスピーカーのお手本が付きものではないか。このような点において、練習も稽古と同じように、この先に起こることを「予測可能」であり、「身心の準備」を整えることもできるに違いない。加えて、練習は一定の技能を獲得することで終わるのではなく、人間はいつも練習を続けなければならないという指摘は、ボルノウの論稿にも繰り返し現れていた。人間とは「練習する存在」であり、「練習者」であることこそが人間の本質なのだ、という命題などは、練習が一定の技能を獲得することで終わるわけではないという事実を、ボルノウが精確に見抜いていたという証拠だろう²³。人間とは「練習する存在」であるというボルノウの命題の射程を、桐田は誤って狭く見積もっていたのではないだろうか。

(1) 桐田が最初に「違和感」を表明しているのは、ボルノウが、稽古を一定の技能の獲得との関連のなかでしか捉えていない、という点である。ヘリゲルらの紹介している弓術の稽古を、禅の思想と結び付いた「修行」として把握した場合、技能の獲得という目的との関連は「ほとんどない」と桐田は言う。「真実の意味での宗教」は、一定の技能ではなく、「人間存在のあり方」に関わるのだ、と言うのである。さらに桐田はこの論点を敷衍しながら、上記のようなボルノウの見方が、稽古を一定の「目的」への「手段」として捉える見方と緊密な関係にあり、このため稽古の特徴を見落としてしまっていると批判している。ボルノウは、無我の境地に関する議論を経た後でさえ、「内面の自由」を獲得するための「手段」として、練習を捉えていた。これに対して桐田は、このように稽古を一定の「目的」のための「手段」として捉える見方が、「本来の意味の稽古」を取り逃してしまい、却って「内面の自由」への道程を立て塞いでしまうことを見抜いて、鋭い疑問を提出したのである²⁴。

ボルノウが、練習または稽古を一定の技能との関連のなかで捉えていることは、間違いない。しかし、桐田も言及しているように、ボルノウもまた、人間の「存在」(das Sein)に深く関わる重要な営為として、練習を捉え直そうとしたのだ。 「正しい練習」において何よりも重視されるのは、一定の技能を獲得することではなく、「最も本来的な人間の存在を実現すること」なのだ、という指摘などを見れば、ボルノウの議論と桐田の議論の親近性を読み取ることもさえてできるだろう²⁵。一定の技能の獲得よりもむしろ、「正しい生活への道」を開くことこそ、「正しい練習」の「本来の目的」があるのだという

点に、『練習の精神』の議論の核心があった。

とはいえ、『練習の精神』に対する桐田の批判から、得るべきものは何もないのかというと、そうではない。稽古を目的のための手段として把握することに対する、桐田の厳しい異議申し立ては、本稿の課題に照らしても注目に値するものである。桐田が批判の対象としているのは、例えば前節の最後にも引用した、『練習の精神』の次のような一節である。

誤解されないように明確に強調しておくなら、練習は、ここで追求されている生の充実を達成するための、唯一の方途というわけではない。けれども、練習は、この変化を意図的に意識的な努力によって引き寄せるための、唯一の手段なのだ²⁶。

これに対して桐田は、稽古を目的のための手段であると「いきってしまう」ことにより、稽古から抜け落ちてしまうものが「多くあるように思う」と懼れている。なぜなら、手段と見做されることによって、稽古は目的に従属することになり、稽古自体に含まれている意味が見失われてしまうからである。このように目的と手段を区別するような考え方に対して、桐田は、目的と手段を分離することなく、「統合していく」ような考え方こそ、稽古にふさわしいものだと主張している。稽古が単なる手段だと見做されているあいだは、稽古によって何らかの「内面の状態」が形成されることは「ない」と桐田は断言する。稽古は「手段ではなくなった」ときに初めて、「本来の意味の稽古になる」と言うのである²⁷。

実のところ、桐田によるこの批判もまた、ボルノウの議論の射程を誤って狭く見積もっており、『練習の精神』に対する批判としては精確なものではない。けれども、練習＝稽古を単なる「目的のための手段」として捉える考え方が、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまうという指摘は、一定の根拠を持っている。節を改めてこの根拠を突き止めることにしよう。

第三節 「泰然自若」というアポリア

桐田が指摘したのは、「内面の自由」という目的のための手段として稽古を捉えると、却って「内面の自由」への道程を立て塞いでしまう、ということだった。しかしなぜ、稽古を「目的のための手段」と捉える考え方が、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまうことになるのだろうか。この疑問に対して桐田は、詳しい回答を残していない。この問題を考えるうえで貴重な示唆を与えてくれるのは、「正しい生活」あるいは「内面の自由」の基調をなしている、我意を手放した「泰然自若」という「心の状態」に関する、ボルノウの論考である。

ボルノウによれば、「泰然自若」という心の状態とは、

人間を取り巻いている環境と衝突しかねない「我意」や「我欲」を「手放した」状態を指していた。このような概念が用いられた背景には、例えば弓術の稽古に関するヘリゲルの報告に見られるような、無我と無欲の境地に関する洞察があった。「内面の自由」と「泰然自若」との関係性を説き明かすなかで、ボルノウは、適度に抑制の利いた筆致で次のように書いている。

以上によって同時に明らかになったことは、我意の放棄は意志一般の放棄ではなく、単に邪魔な我田引水から意志を純化することを意味しているということ、また「無我」というのも〔……〕狭小な関心と過敏さを伴った「小さな」日常の自我にのみ関係しているということである²⁸。

この「泰然自若」に関してボルノウは、『練習の精神』の数年前に刊行された著作のなかで、これが「純粋な」「直観」(die Anschauung)を獲得するための前提条件ともなることを、説き明かしている。ボルノウによれば、直観とは「実用上の取り扱いのような単純な図式主義に邪魔されることなく、現実性の充実を受け止めること」だという。言い換えるなら、「有用性の思考の制約から解き放たれて、諸事物を固有の存在において」捉えることが、ボルノウの言う「直観」の特徴にほかならない²⁹。この純粋な「直観」を獲得するために要求されるのが、「我意を離れ去って、信頼を抱きながら、干渉してくる出来事へと身を委ねた」「泰然自若」という状態である。このように純粋な直観の前提条件となるかぎりにおいて、「泰然自若」は、人間の「高度の完全性」への要求に答えるものだとさえ言われる³⁰。

この箇所においてボルノウは、「泰然自若」という概念を導入するに当たって、『練習の精神』の場合とは違い、弓術の稽古には特に言及していない。この箇所において「感謝と賛意を込めて」参照されているのは、おなじく「泰然自若」の概念を用いて、形而上学の伝統に差異をしかけた、ドイツの哲学者ハイデガー(M. Heidegger)の思想である。ハイデガーによれば、主体としての人間を世界の中心に置き、操作されるべき客体として事物を捉えるような、近代科学の傾向は、人間中心主義としての形而上学の伝統に基づいている。近代科学のこの傾向は、事物を利用されるべき「資源」として捉え、人間をも活用されるべき「人材」として把握するような、現代社会の特徴と深く結びついている。このように、有用性と価値の思想に絡め取られた近代科学の傾向を突破すべく、ハイデガーは、「泰然自若」という概念を用いて、形而上学の伝統に差異をしかけたのだ³¹。

以上の検証作業に基づいて、本節の最初に提示された問題に戻ろう。これまでの議論から、次のことが判然と

してきた。ボルノウの言う「泰然自若」とは、意志一般や自我一般を放棄することではなく、自己を中心とした我田引水の範疇や有用性の尺度から解き放たれることを意味している。現代社会を生きている私たちは、普段、ほとんど意識しないままに、「何の役に立つのか」という有用性の尺度に基づいて、身の回りの事物や人物を評価している。しかもこの「何の役に立つのか」という尺度には往々にして、「私にとって」という我田引水の範疇が含まれているものだろう。『練習の精神』の核心を占める「泰然自若」という概念は、このような事物の有用性への固執を捨て去り、自己の利益への執着を離れ去った、「開かれた」状態のことを意味しているのだ。

だからこそボルノウは、このように我意を離れ去った「泰然自若」を、「内面の自由」に不可欠の特徴として、練習の目的に掲げたのだった。ところが、まさにこの点において、練習の目的として掲げられた「泰然自若」という概念に、一種のアポリア＝難問が孕まれていたことが明らかになる。「泰然自若」が「内面の自由」に不可欠の特徴として目的に掲げられ、さらに練習がこれを実現するための手段として捉えられた途端に、「泰然自若」と練習の両方が、我田引水の範疇と有用性の尺度に絡め取られてしまう。というのも、練習によって「泰然自若」を達成しようとするものは、「泰然自若」を達成したいという我欲に囚われており、この目的のための手段として用いられる練習は、我欲を満たすために「役に立つ」と考えられて有用性に換算されているからだ。手前勝手な自我から解き放たれた「泰然自若」という状態は、これを実現することが目的に掲げられた途端に、我田引水の範疇と有用性の尺度に絡め取られてしまうという、パラドキシカルな性格を孕んでいたのだ。

ここから、練習を「目的のための手段」として捉える考え方が、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまう、という、桐田の批判の根拠が判然としてくる。何らかの「目的のための手段」として練習を把握するとき、練習と練習者はともに、我田引水の範疇と有用性の尺度に縛られている。練習が「内面の自由」という目的のための手段として捉えられた途端、この練習は「正しい生活」や「高度の完全性」を実現するのに「役に立つ」手立てとして、練習者の我欲を満たすために用いられることになる。このように「内面の自由」を獲得する「ために」行われる練習は、目的・手段の二項対立に囚われているゆえに、最初から我田引水の範疇と有用性の尺度に束縛されてしまっており、このため却って「内面の自由」に向かう道程を立て塞いでしまうのである。

第四節 目的内包型の行為としての練習

このような洞察を得たことにより、単に練習が何の役に立つのかを明らかにした著作として、素朴な機能主義

の観点から『練習の精神』を褒め称えることは、厳しく戒められることになる。桐田による批判を端緒として、私たちは、「正しい生活への道」＝「内面の自由への道」としての練習に関するボルノウの論考を、これまでとは異なる観点から、改めて読み解くことを求められることになるのだ。このとき注目されるべきは、『練習の精神』の議論に組み込まれている、練習を目的内包型の行為として捉えるような、独特の視座の存在である。

確かに、桐田が指摘しているように、また本稿も確認してきたように、ボルノウは、練習を「内面の自由」を獲得するための手段として把握していた。こうした箇所を読むかぎり、ボルノウが練習を目的・手段の二項対立へと回収しており、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまっている、という指摘は正しいようにも思われる。ところが、『練習の精神』の議論には、このように練習を目的・手段の二項対立のなかで捉える見方を、あたかも反転させたかのような視座が組み込まれている。桐田はこの点を見逃していた。第一節に引用した練習の機能に関する問いに続いて、これと並列するように、ボルノウは次のような問いを立てている。

〔……〕正しく理解された練習は、すでに練習自体として、外から持ち込まれた何らかの動機になどよらなくても、喜びを生むのであって、それゆえ人間は、練習によって獲得される何らかの利益のためなどではなく、練習すること自体の純粋な喜びから、好んで練習するのではないだろうか³²。

この問いに対する答えは、最終章の第八節「結語」の末尾に、最も明確なかたちで与えられている。

ここに至って、我々が出発点とした、あの繰り返しの嘆かれた教授法の困難が、登場してくる。練習とは何か面倒なものであり、子どもを練習へと向かわせるには、外からの動機による誘惑を用いるしかない、と。

〔しかし〕練習が正しい仕方でも——それ自体のなかで目的合理的な行為として体験されるや否や、こうした困難は消え去って、練習は高度な幸福をもたらす行為として経験されることになるのだ³³。

この箇所に提示されているのは、練習を目的・手段の二項対立の図式から解き放ち、目的と手段が混然一体となった行為として捉えようとする視座である。これは、目的と手段を分離することなく「統合していく」ことを唱えた、桐田の立場に通じるところがある。この視座に立つことによって、練習は、目的から分離された手段ではなく、目的と手段が織り合わされた目的内包型の行為として捉え返され、「内面の自由」もまた、手段から分離

された目的ではなくて、行為のなかに編み込まれた行為内在型の目的として捉え返されることになる。

目的内包型の行為の典型といえば、子どもの遊びが思い浮かぶだろう。子どもは素朴に遊ぶことが楽しいから遊ぶのであって、遊ぶことの外に何か目的を掲げているわけではない。もちろん、健全な身体の育成や仲間関係の構築を、遊びの目的として規定することはできるし、事実、教育学はこのような視点から遊びを捉えてきた。しかしこれらはいずれも、教育に携わる大人の視点から遊びの意義を分析したものであって、実際に遊んでいる子どもが（大人も）こうした目的を掲げているわけではない。将来達成されるべき目的を掲げた途端に、遊びは目的のための手段＝作業または労働となり、遊びを遊びとして楽しむことはできなくなってしまう。遊ぶことに目的があるとすれば、当該の遊びを心ゆくまで楽しみ、十全に遊ぶことだけだろう³⁴。

もちろん、練習は遊びのように「純粋に」目的内包型の行為であるわけではない。例えば、「ピアノの練習」にはピアノの演奏の上達という目的があるように、練習はいつも、内在型の目的＝「内面の自由」の獲得と、外在型の目的＝例えば「ピアノの演奏の上達」という、二重の目的を持っている。ボルノウも、練習が「自己目的」と化してしまうことを警戒して、練習と「真剣な責任を伴う生活連関」との関係性を強調している。練習を通して獲得された能力は、「生活連関のなかで一定の遂行を」果たさねばならず、練習は「生活連関から離れたままで」あってはならないというのだ³⁵。

練習が目的内包型の行為であるということは、個々の能力の獲得に関わる目的とは別に、件の「内面の自由」という目的が、練習の外ではなく練習の中に編み込まれていることを意味している。要するに、「本来の」練習を行うということは「内面の自由」を獲得するというところに相等しく、また「内面の自由」は練習のなかで練習を行っているときに実現されるのだ、ということになる。思い返せば、練習と精神集中の関係を説明するなかで、ボルノウは、すでにこの点を指摘していた。すなわち、本来の練習を実施するということが、十全な精神集中を実現するということがあり、また本来の練習のなかで初めて、十全な精神集中が実現されるのだった³⁶。

こうした洞察は、弓術の稽古に関する検証を通して、確証を与えられ深められたものである。ヘリゲルによる報告を参照することで、ボルノウは、ひとまず我欲を離れた「無我」の境地を、練習の「目的」として設定したのだった³⁷。しかしそのすぐ後の節において、ボルノウは、デュルクハイム（K. G. Dürckheim）の報告を引用しながら、次のように書き留めている。

練習は練習の外に設定された目的など持つてはい

ない。日々の成り行きの中で滑り落ちてしまう内面の調和の状態を、再び獲得するために、練習は常に新たに繰り返されなければならない³⁸。

「人間は練習している場合のみ全き人間でいられる」というボルノウの命題は、こうした観点からのみ十全に理解されることができる。「内面の自由」は練習を離れてあるわけではなく、したがって、一度獲得すれば練習を止めても持続するようなものではない。ボルノウに言わせれば、私たちはいつも、注意散漫な日常生活のなかで我意と我欲に急ぎ立てられて、「正しい生活」から滑り落ちてしまう危うい傾向を抱えている。練習を行うということは、この傾向に抵抗して繰り返し「内面の自由」を取り戻すことにほかならない、というわけだ。

このように、目的内包型の行為という視座を組み込むことによって、ボルノウは、目的-手段の二項対立から練習と「内面の自由」を解き放とうとした。この視座に立って眺めるなら、「内面の自由」は練習から分離された目的ではないし、練習は「内面の自由」から分離された手段ではありえない、ということになる。こうした視座を確保しているという点において、『練習の精神』の議論は、桐田の指摘したような問題点を、克服しうる射程を備えていたと言えるだろう。

第五節 『練習の精神』の議論の「ねじれ」

しかしながら、目的-手段の二項対立と練習の関係性をめぐる問題は、これで平和裡に解決したのかというと、残念ながらそうは言えない。というのも、『練習の精神』の議論のなかには、「目的のための手段」という機能主義の図式に基づいて練習を捉える視座と、この機能主義の図式を越えたものとして練習を捉える視座が、表裏一体となって並存しているからだ。これら二つの異なる観点は、入れ代わり立ち代わり議論の前景に登場してきて、あたかもコインの表裏を返して見せるかのように、練習という現象の異なった側面に照明を当ててみせる。ここに至って本稿は、『練習の精神』の議論に孕まれている、無視することのできない「ねじれ」を、いよいよ目の当たりにすることになる。

（1）『練習の精神』の困難

ボルノウが『練習の精神』に託した課題とは、西洋の伝統のなかで軽視されてきた練習の「機能」を詳しく説き明かし、これまで低く見積もられてきた練習の意義を再評価することにあつた。このため『練習の精神』は、練習を「内面の自由」を獲得するための「唯一の手段」として規定することで、これまで見落とされてきた練習の役割を説き明かそうとした。しかし、練習を何らかの「目的のための手段」として捉えてしまうと、練習自体

が我田引水の範疇と有用性の尺度に捕われてしまい、「内面の自由」への道程が閉塞されてしまう。この難問を克服するためには、「内面の自由」という目的を、練習という手段の外に置くのではなく、練習の中に織り込まれたものとして、捉え返すことが求められた。

ところが、このように「内面の自由」を行為内在型の目的として捉える視座に立つとなると、練習の機能を説き明かすという当初の課題を満たすことが難しくなる。なぜなら、この視座は目的-手段の二項対立から自由でなければならず、この視座に立っているかぎり、練習が「何の役に立つのか」という問いを、素朴に問うことができないからだ。このために『練習の精神』の議論は、練習を「目的のための手段」として捉える、目的-手段の二項対立に基づく視座を、捨て去ることができない。練習の意義を再評価するという当初の課題を満たすには、一度は練習という行為に含まれる目的として捉えられた「内面の自由」を、改めて練習の外に置かれた目的として把握することが欠かせないのだ。

このように『練習の精神』は、練習が「何の役に立つのか」を説き明かすという課題と、練習を目的-手段の二項対立に絡め取らずにおくという課題を、容易に両立させることができないという困難を抱えている。これにより『練習の精神』の議論には、件の機能主義の図式に基づいて練習を捉える視座と、機能主義の図式を越えたものとして練習を捉える視座とを、相互に絡み合わせたような、奇妙な「ねじれ」が生じることになった。

(2) 機能主義に基づく視座

機能主義の図式に基づいて練習を捉える視座の特徴は、練習の核心に「目的の達成への意図」を置いている点にある。この傾向が最も顕著に現れているのは、本稿の第一章にも引用された次のような箇所である。

誤解されないように明確に強調しておくなら、練習は、ここで追求されている生の充実を達成するための、唯一の方途というわけではない。けれども、練習は、この変化を意図的に意識的な努力によって引き寄せるための、唯一の手段なのだ³⁹。

ここではまさに、練習が、「内面の自由」という目的を「意図的」「意識的」に達成するための、「唯一の手段」であることが強調されている。この練習者の「意図」や「意識」に基礎を与えているのは、「内面の自由」を達成したいという「我欲」や、このために練習を利用しようとする「我意」にほかならない。この我意や我欲を基礎とすることで、初めて「目的」や「手段」といった概念が生まれ、練習を通して「内面の自由」を獲得しようという意図や意識が醸成されることになる。これにより、

「内面の自由」は達成すべき目的として、練習はこれを達成するための手段として、機能主義の観点に基づく目的-手段の二項対立に組み込まれる。

こうした「我意」や「我欲」の介入を象徴しているのが、これまでも登場した「um~willen」(～のために)という常用の成句である⁴⁰。例えば、先に引用した箇所について、ボルノウは次のように書いている。

[日本の伝統文化のなかの練習において]、ひとが個々に適した技芸を学ぶのは、学ぶなかで獲得されるべき実践上の能力のためではなく、学ぶなかで達成されるべき人間の浄化と内面の変化のためなのだ⁴¹。

このように、「内面の自由」を獲得する「ために」練習を行うと書かれるとき、「内面の自由」と練習の両者は、いつもすでに「目的のための手段」という図式のなかで捉えられている。素朴な「ために」あるいは「のため」という言葉が、「内面の自由」と練習を目的と手段に分離しており、両者を我田引水の範疇と有用性の尺度に組み込む働きをしている点に注目しよう。このとき、練習者の意図・意識は当然「内面の自由」という目的のほうに向けられており、これに伴って、練習はこの目的に貢献すべき手段として把握されている。練習者の注意は、「内面の自由」の獲得に向けられるべきであって、練習されている行為の上達に向けられるべきではないということ、ボルノウは次のように書き留めている。

それゆえ、このように一種の内面の態度の獲得へと向けられた練習は、最高の遂行を目指すトレーニングからは、明確に区別されなければならない。なぜなら後者においては、注意がもっぱら〔練習の〕成果に向けられていて、この成果を実現可能にしている内面の状態には向けられていないからである⁴²。

こうした箇所において『練習の精神』は、練習に与えられた「本来の目的」は「内面の自由」の獲得であり、練習はこの「内面の自由」の獲得の「ために」行われるべきであり、練習者の意図・意識はこの「内面の自由」の獲得に向けられていなければならないということ、繰り返し明確に提唱している。

(3) 機能主義を越えた視座

機能主義の図式を越えたものとして練習を捉える視座の特徴は、練習者の「我を忘れた没頭」を練習の核心に置く点にある。練習にとって、練習されるべき行為への「我を忘れた没頭」が重要である、という最初の指摘は、『練習の精神』後半の始めに見られる。

むしろ練習というのは、練習されるべき行為への、我を忘れた没頭を要求するものだ。すなわち、行為をできるかぎり良くし、繰り返すたびに前回よりも良くしようという意志を⁴³。

この箇所においては、まだ「内面の自由」という目的は設定されておらず、個々の行為の上達のための練習が成功するための条件として、「我を忘れた没頭」が導入されている。このときこの「我を忘れた没頭」は、練習者が「注意散漫」や「不注意」の状態にある場合のほか、「深刻な悲嘆に暮れている場合」や、「将来の出来事への喜ばしい期待に震えている場合」と、対比されている。すでに第一章にも見てきたように、ボルノウによれば、この「我を忘れた没頭」は、練習の前提であると同時に目的でもあるのだった。ここから練習は、高い精神集中を獲得した「正しい生活」への道程として、さらには、泰然とした「内面の自由」への道程として、従来は軽視されてきた独特の意義を与え返されたのだった。

したがって、「内面の自由」の獲得を目的とする練習にとっても、重要なのはやはり「我を忘れた没頭」なのだということになる。例えば、デュルクハイムの報告に基づいて書かれた、次のような箇所を見てみよう。

とはいえ、たとえ完成された遂行ではなく練習者の内面の態度が、練習本来の目的なのだととしても、逆にこの態度は直接の道程を経てではなく、特定の技芸の練習という迂回路を経てのみ達成されるのだ。[……]人間の成熟は、完璧に遂行されるべき練習への、全き没頭のなかでのみ成功するのだ⁴⁴。

練習されるべき行為への「没頭」の要請は、ちょうど子どもが遊びに夢中になる時のように、将来の目的を忘れて現在の行為に集中することを求める。このとき、練習されるべき行為だけが関心事となり、「内面の自由」という目的が一度忘れ去られるため、練習は「迂回路」(der Umweg)だと言われるのだ。これにより、練習と「内面の自由」の両方が、「目的のための手段」という件の図式から離れ落ちて、我田引水の範疇と有用性の尺度から解き放たれることになる。この「迂回路」としての練習の性格について、手仕事や芸術製作との関連から、ボルノウは次のように書いている。

このとき考慮されねばならないのは、人間を変容させる練習の働きは、それ自体として直接に追い求められることなく、いわば行為の背後に生じてくる場合のみ、生じてくるということだ。このとき[練習者の]注意は、完全に外側の目的に、すなわち能力を用いて作られるべき作品に、向けられている⁴⁵。

こうした箇所において『練習の精神』は、たとえ練習の「本来の目的」が「内面の自由」の獲得だとしても、練習者の注意は練習されるべき行為に向けられなければならないということを、繰り返し警告している。

(4) 議論の「ねじれ」の典型例

このように『練習の精神』の議論には、件の機能主義の図式に基づいて練習を捉える視座と、機能主義の図式を越えたものとして練習を捉える視座が混在している。これら二つの異なる視座は、ちょうど表裏反対の関係にあって相容れないため、この表裏が反転するときには、奇妙な「ねじれ」が生じることになる。この「ねじれ」は本書の議論全体を通して緩やかに反復されているが、これが特に顕著に現れてくる箇所がある。それは、上に示した二つの視座が同時に含まれており、裏と表が交代しながら接続されているような箇所である。長くなるが重要な箇所なので、省略せずに引用しておきたい。

自己を忘れ去った練習のなかで体験される、深い幸せをもたらす高揚のことを考えれば、ひとがこの高揚のなかに生の最高の充実を見て取り、この高揚自体を目的にしてこれを追求し、なるべく長くこのなかに留まることは、容易に推測できる。けれども、このとき誤解されているのは、練習が、本質に従って言うなら自己目的ではなく、そのために練習が行われるような真剣な生活に関連しているということだ。それゆえ、人間が練習のなかで正しい内面の状態、内面の自由、泰然自若を見つけた後には、責任を持って彼の課題を果たすために、色々な取り扱いをする生活に立ち返ることが重要なのだ。この課題は、彼が練習のなかに身を引くより前からあったのと同じものだが、彼はいまやこれを新しい、内的に自由な、泰然とした仕方では、——だからこそまさに、以前にできたより上手く——果たすことができるのだ⁴⁶。

この箇所の前半には、自己を忘れ去った練習のなかで体験される幸福感・高揚感が、私たちに惹きつける魅力を持つことが説かれている。ここでは、練習そのものが「すでに喜びをもたらす」営みとして捉えられており、「内面の自由」は練習のなかで体験される内在型の目的として捉えられている。しかし後半になると、この泰然とした「内面の自由」を日常生活へと持ち帰り、種々の課題に取り組むべきことが説かれている。このとき泰然とした「内面の自由」は、練習から分離された外在型の目的として捉えられており、種々の課題を「より上手く」(besser)遂行する「ための」基礎として、我田引水の範疇と有用性の尺度のなかに捕捉されている。

この箇所を何の違和感も抱かずに読むことができると

すれば、それは読者が「目的のための手段」という図式に慣れ親しんでおり、個々の現象を機能主義に基づいて把握することに抵抗を覚えなくなっている場合だろう。しかしながら、この「目的のための手段」という図式が、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまうことが明らかにされた以上、この箇所を典型とする『練習の精神』の議論の「ねじれ」に注目することなく、本書を読み進めることは許されないだろう。このためここに至って、ボルノウの議論を通じて現れてくるこの「ねじれ」を、『練習の精神』の核心を占める「ねじれ」として精確に見定めることが、本稿の重要な課題となる。

第六節 『練習の精神』とメビウスの輪

機能主義の図式に基づいて練習を捉える視座と、機能主義の図式を越えたものとして練習を捉える視座とは、相矛盾しており相容れないが、どちらか片方が欠けても『練習の精神』の議論は成立しない。第一の視座に立つなら、「内面の自由」という目的のための手段として練習を捉えることができるが、両者を「目的のための手段」という図式に絡め取ってしまうため、「内面の自由」への道程を立て塞いでしまうことになる。第二の視座に立つなら、練習と「内面の自由」を「目的のための手段」という図式から解き放つことができるが、件の「何の役に立つのか」という基準を参照することができないため、練習の果たすべき役割を説明することができなくなる。このため重要なことは、これら二つの視座のどちらが、ボルノウ本来の視座なのかを、決定することではない。本節の課題は、このように二つの異なる視座が交差反転を繰り返すような議論を通して、『練習の精神』は読者に何を伝えようとしているのか、読者を何処へ導こうとしているのかを、丁寧に説き明かすことにある。

(1) 議論の「ねじれ」と問いの誘発

なるほど、前節に検証された二つの視座を比べてみると、確かに両者は互いに相容れない要素を含んでいる。改めて簡単に整理しておくと、①練習を機能主義の観点から捉えるのか、機能主義を越えた営みとして捉えるのか、②練習者の意図・意識が重要視されるのか、我を忘れた没頭が重要視されるのか、③「内面の自由」という「本来の目的」に注意を向けるべきなのか、練習されるべき行為のほうに注意を向けるべきなのか、という三つの点において、二つの視座は相互に対立しあっている。しかしながら、この二つの視座の矛盾対立を、ボルノウの議論の欠点として非難するのは軽率である。なぜならこれらの矛盾対立を背景とする議論の「ねじれ」のなかにこそ、練習という営みの理論と実践の双方に関わる、重要な課題が示唆されているからだ。

『練習の精神』を注意深く読み進めていくと、様々な

箇所において、前節に見たような議論の「ねじれ」に行き当たることになる。例えば、機能主義に基づく議論が続いたため、機能主義に基づく視座から読み解いていると、唐突に機能主義を越えた視座が導入され、機能主義には回収できない議論が始まったりする。また、これを受けて機能主義を越えた観点から論旨を追っていると、今度は逆に機能主義に基づく議論が再開されて、練習が「何の役に立つのか」が説かれていたりする。このように『練習の精神』の議論は、表を歩いていたかと思うと、いつのまにか裏を歩かされており、裏を辿っていたかと思うと、いつのまにか表に戻っているという、ちょうど「メビウスの輪」のような構造を持っているのだ。

二つの異なる視座を貼り合わせた接点が、さりげなく巧妙に接続されているために、なにげなく読んでみると読み飛ばしてしまいそうになる。しかし、ひとたび議論の表裏が反転している箇所を見留めてしまうと、もはやこれを無視して読み進めることはできなくなる。上掲の①②③の対立点が、練習という営みの核心に関わる問いとして、読者を捕えて離さない。改めて書き留めておくなら、①練習を機能主義の観点から捉えるべきなのか、機能主義を越えた営みとして捉えるべきなのか、②練習者の意図・意識が重要なのか、我を忘れた没頭が重要なのか、③「内面の自由」という「本来の目的」に注意を向けるべきなのか、練習されるべき行為のほうに注意を向けるべきなのか。裏表を反転させた輪を歩みながら、議論の「ねじれ」に逢着するたび、読者はこれらの問いを問わざるを得なくなるのである。

このように、読者が避けることのできない「問い」を誘発するという点に、『練習の精神』に孕まれている議論の「ねじれ」の特徴がある。したがって、練習の本質に関わる問題に確固たる回答を与えてくれる著作として、『練習の精神』を読み解いたのでは、本書の最も重要な趣向を取り落としてしまうことになる。『練習の精神』の読者に課せられた課題とは、すなわち、ボルノウの論稿に孕まれている議論の「ねじれ」を目の当たりにして、この「ねじれ」をバネとして打ち開かれる問いを真摯に引き受けることであり、これを練習という営みの核心に関わる問いとして問うことにほかならない。

(2) 理論家の問いと実践者の問い

いま仮に、練習に関わる上掲の三つの問いを分類してみるなら、①は練習の理論を構築しようとする理論家にとって特に深刻な問題であり、③は実際に練習を行おうとする実践者にとって特に深刻な問題であると言える。あいだに挟まれた②は、ちょうど理論と実践の両方に関わる、中間項として位置づけられるだろう。

練習に関する理論を構築するべく、『練習の精神』を参照しようとする理論家は、ボルノウの議論に孕まれた

「ねじれ」を目の当たりにして、当惑することになる。『練習の精神』をなにげなく読み進めれば、ボルノウは練習を機能主義の観点から捉えて、練習が何の役に立つのかを説き明かしているように見える。しかしながら、核心に迫ろうかという箇所に見える、機能主義を越えた観点に基づく議論が、練習を目的 - 手段関係のなかで捉えることを厳しく戒める。練習は「目的のための手段」であると学んだそばから、この図式を練習に当て嵌めることを禁じられてしまう。二つの異なる視座によって、二つの矛盾した方向へと引き裂かれて、理論家の理解はいわば、「宙吊り」にされてしまうのである。

これと同様の問題が、実際に練習を行おうとする実践者にとっては、なおのこと差し迫った問題として立ち現われてくる。『練習の精神』の議論を読み解いていくと、「内面の自由」の獲得こそ練習本来の目的であり、練習はこのための手段だという記述に、繰り返し出会うことになる。ところが、これに従って練習を「目的のための手段」として把握してしまうと、却って「内面の自由」への道程が立て塞がれてしまう。このためボルノウは、実のところ「内面の自由」という目的に注意を向けてはならないのであって、練習されるべき行為へと没頭することが重要なのだと説く。「内面の自由」こそ練習本来の目的であると学んだそばから、この目的を掲げて練習を営むことを禁じられてしまうのだ。二つの異なる視座によって、二つの矛盾した方向へと引き裂かれて、実践者の理解もまた、「宙吊り」にされてしまうのである。

これら理論家と実践者の問いは、機能主義の観点から捉えられた練習の意義や、練習本来の目的として掲げられた「内面の自由」を、学び知ったそばから忘れなければならない、という奇妙な課題を含んでいる点で、共通の特徴を有している。このとき、一度は学び知ったことを忘れ去る (verlernen) ことは、「目的のための手段」という図式を離れ去り、この図式を越えた視座を確保することで、練習と「内面の自由」の両方を、目的 - 手段の二項対立から解き放つことを意味している。とはいえ、理論家が練習の意義を説き明かし、実践者が練習に取り組むためには、「目的のための手段」という件の図式を、完全に捨て去ることなどできない。『練習の精神』の読者に求められているのは、ちょうどメビウスの輪の裏と表を辿りながら、円を描いて歩みを進めるように、二つの異なる視座を往還しながら、練習という営みをめぐる問いを問い続けることなのだ。このように読者を巻き込む問いの輪は、問い続けるほどに中心が明確になり深さを増してゆく、渦のような性格を持っている。この問いの渦を問い深めることで初めて、機能主義に基づく観点にも機能主義を越えた観点にも容易に収まらず、二つの異なる視座を確保することを要求するような、両義性に満ちた練習の特徴が、両義性を両義性として開き保たれた

まま、輪郭を縁取られることになるのである。

(3) 『練習の精神』と「問いへの教育」

ボルノウの思想に慣れ親しんだ読者であれば、ここに至って、『問いへの教育』と題された彼の講演録を思い起こすかもしれない。この著作に収録された同名の講演のなかでボルノウは、「人間とは問う存在である」と説き、「真の対話」を通じて「問うこと」へと導くことこそ、教育者の重要な役割であると唱えている⁴⁷。この講演録の初版は『練習の精神』とおなじく1978年である。このような事実を踏まえるなら、『練習の精神』という著作はまさに、練習という営みの核心をめぐる「問い」へと、読者を導き入れることをこそ課題としていた、と考えたとしても、あながち的外れとは言えないだろう。

とはいえもちろん、『練習の精神』という著作が読者を問いに導き入れる構造を持っているからといって、著者ボルノウがこの構造を意図的・意識的に組み込んだのだということまで確証されるわけではない。ここに至って重要なことは、ボルノウが練習という現象の探求に真摯に取り組んだ結果として、意図的・意識的であるにせよ無意図的・無意識的であるにせよ、読者の理解を宙吊りにしてしまうような議論の「ねじれ」が、この著作を通して生じてきたという点である。練習という営みに真摯に取り組もうとするのなら、「目的のための手段」という機能主義の図式に基づく視座と、この機能主義の図式を越えた視座という、二つの異なる視座を往還することが要求されることになる。二つの視座の矛盾対立を避けるために、どちらか片方の視座を捨て去ってしまうなら、練習という営みの両義性に満ちた特徴は、覆い隠されることになるだろう。読者を問いへと誘う『練習の精神』の議論の「ねじれ」は、著者ボルノウが練習という現象の探求に真摯に取り組むなかで、巧まずして生じてきた議論の構造であると言える。

こうした洞察を補完してくれるのが、『問いへの教育』に収められた、次のような短い忠告である。

しかし、みずから誠実に問うことができるもののみが、問うことへと教育することができるのです⁴⁸。

西洋の伝統のなかでは見逃されてきた練習の意義を明らかにするべく、ボルノウは、人間の生のなかで練習が果たすべき役割に向かって「誠実に」問うた。この結果『練習の精神』の議論には、練習という営みをめぐって二つの異なる視座が交代劇を演じる、奇妙な「ねじれ」が生じることになった。練習という現象元来の両義性に由来するこの「ねじれ」は、著者ボルノウの「誠実な」問いを契機として発現したものであるかぎりにおいて、『練習の精神』の読者をも、練習をめぐる問いの渦へと

導き入れる働きを宿している。こうして『練習の精神』という著作は、異なる二つの視座を往還しながら、確立された「答え」ではなく反復される「問い」のなかに、練習という現象元来の両義性を開き保つ、メビウスの輪のような構造を持つことになったのである。

ボルノウの著作を読み解こうとする従来の研究には、ボルノウの理論の内容を精査したものは多く見られるが、管見によれば、ボルノウの議論の構造にまで目を向けたものはなかった。これに対して本稿は、『練習の精神』に孕まれている議論の「ねじれ」に注目することにより、練習という営みに関するボルノウの論考が、読者を問い

の渦へと導き入れるような、ダイナミズムを宿したものであることを明らかにした。これにより、ボルノウの他の諸論稿に関しても、各々の議論の構造に注目しながら読み解くことにより、新たな意義が与え返されるのではないかという期待が生まれる。数多あるボルノウの著作は、単に個々の現象の本質に関する問題に「答え」を与えた論稿にすぎなかったのか、あるいは『練習の精神』のほかにも、個々の現象をめぐる「問い」を誘発しうる「ねじれ」を孕んだ論稿があるのか。こうした「問い」の提起をもって結びに代えるとしても、本稿の趣旨からすれば的外れなことではないだろう。

— 註 —

- 1 Bollnow (1978).
- 2 ボルノウ (2009) : 216-220.
- 3 Bollnow (1978): 11-12.
- 4 cf. *ibid.*: 3.
- 5 *ibid.*: 18. なお、「sinnvoll」と「unentbehrlich」に「目的合理的」「必要不可欠」という訳語を当てた事情に関しては、筆者の学位論文(井谷 2010)の第一章を参照のこと。本稿の全体は、この学位論文の成果を受けて、ボルノウ教育学の批判的「再考」を発展的「再興」へと転回させようとする、最初の試みである。
- 6 『練習の精神』の概要については、日本においても邦訳書の出版以降に、中野優子(2010)による図書紹介(『教育哲学研究』第101号)が概説をしているほか、広岡義之(2010)が詳細に論じている。
- 7 Bollnow, *op. cit.*: 58.
- 8 *ibid.*: 55-56.
- 9 *ibid.*: 56.
- 10 *ibid.*: 57-58.
- 11 *ibid.*: 60-61.
- 12 *ibid.*: 61 & 63.
- 13 *ibid.*: 63-64.
- 14 *ibid.*: 76.
- 15 *ibid.*: 77-78.
- 16 *ibid.*: 80-81.
- 17 *ibid.*: 81.
- 18 *ibid.*
- 19 桐田 (1985)
- 20 *ibid.* : 11-18.
- 21 *ibid.*: 17-18.
- 22 *ibid.*: 14-17.
- 23 Bollnow, *op. cit.*: 52 & 94.
- 24 桐田前掲論文 : 11-14.
- 25 Bollnow, *op. cit.*: 68-69.
- 26 *ibid.*: 81. (傍点引用者)
- 27 桐田前掲論文 : 13-14.
- 28 Bollnow, *op. cit.*: 77-78.
- 29 Bollnow, O. F. (1973): 81-82.
- 30 *ibid.*: 87-88.
- 31 cf. Heidegger, M. (1959).
- 32 Bollnow, O. F. (1978): 19. (cf. *ibid.*: 43.)
- 33 *ibid.*: 115-116. (傍点引用者)
- 34 素朴な成長発達の理論には回収することのできない、「遊ぶこと」の不思議さ・奥深さに関しては、矢野智司の論稿(矢野 2006)が重要な示唆を与えてくれる。
- 35 Bollnow, *op. cit.*: 91.
- 36 cf. *ibid.*: 56.
- 37 cf. *ibid.*: 63-64.
- 38 *ibid.*: 65.
- 39 *ibid.*: 81. (傍点引用者)
- 40 ドイツ語ではこのほか「für ~」や「um ~ zu ...」を用いても、「~のために」を表現することができる。
- 41 Bollnow, *op. cit.*: 81-82. (傍点引用者)
- 42 *ibid.*: 87.
- 43 *ibid.*: 55.
- 44 *ibid.*: 66.
- 45 *ibid.*: 92.
- 46 *ibid.*: 97-98.
- 47 cf. ボルノウ (1988)
- 48 *ibid.*: 203.

— 参考文献 —

- (1) Bollnow, O. F. (1978) *Vom Geist des Übens: Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrung*, 2. durchgesehene und erweiterte Aufl. 1987 (Oberwill: Kugler).
- (2) Bollnow, O. F. (1973) *Das Doppelgesicht der Wahrheit: Philosophie der Erkenntnis. Zweiter Teil* (Stuttgart: Kohlhammer).
- (3) Heidegger, M. (1959) *Gelassenheit* (Pfullingen : Neske).

- (4) 井谷信彦 (2010) 「存在論と『宙吊り』の教育学——ボルノウ教育学の再考を軸に——」(2011年3月に京都大学より博士号を授与された学位論文)
- (5) ボルノウ著／森田孝・大塚恵一訳編 (1988) 『問いへの教育：「都市と緑と人間と」ほか10篇 増補版』川島書店 (初版1978年)
- (6) ボルノウ著／岡本英明監訳 (2009) 『練習の精神：教授法上の基本的経験への再考』北樹出版
- (7) 桐田清秀 (1985) 「練習と稽古——ボルノウの『練習の精神について』によせて」『花園大学研究紀要』第16号
- (8) 広岡義之 (2010) 「ボルノウにおける「練習の精神」の教育学的一考察」(『兵庫大学論集』第15号)
- (9) 矢野智司 (2006) 『意味が躍動する生とは何か：遊ぶ子どもの人間学』世織書房